

昭和46年度茶園関係除草剤・ 生育調節剤試験成績概要

農林省茶業試験場茶樹第3研究室長 青野英也

昭和46年度における茶園関係の除草剤・生育調節剤の試験件数は、除草剤3種類、生育調節剤2種類で、茶業試験場、同枕崎支場、京都府立茶業研究所、埼玉県茶業試験場、滋賀県茶業指導所、奈良県農業試験場、宮崎県総合農業

試験場、静岡県茶業試験場、岐阜県農業試験場の9場所で試験した。この試験成績検討会が昭和47年2月19日、茶業試験場枕崎支場で行なわれたので、その概要を報告する。

昭和46年度茶園関係除草剤・生育調節剤試験成績審査判定表

I 除草剤

薬 剤 名	有効成分及含有率	判 定	内 容	委 託 者 名
トリフルラリン (トレフアノサイド 粒剤2.5)	α, α, α -トリフルオル-2,6-ジニトロ-N, N-ジプロピル-パラートルイジン 2.5%	実用化	10~15g/a(成分量)を年2回程度。表面散布または土壌混和	シオノギ製薬
M B - 206	尿素化合物 1.5%	継 続	抑草効果はかなり認められるが、施用した12~15g/aではやや抑草期間が短かいので、施用量を増すとともに、試験場所数を増加して継続検討	丸和物産
テトラピオン (フレノック液剤)	2,2,3,3-テトラフルオルプロピオン酸ナトリウム(テトラピオン) 30%	継 続	液剤・粒剤ともに宿根性雑草、ササ、チガヤ、ススキ等に対する殺草効果は顕著で、本年の場合特にチガヤで	ダイキン工業 住友化学工業
テトラピオン (フレノック粒剤)	〃 10%	継 続	効果がみられているが、秋期に処理も行なわれているので、引き続き検討する。	

II 生育調節剤

薬 剤 名	有効成分及含有率	判 定	内 容	委 託 者 名
IBA(オキシベロン)	インドールブチリックアシッド 0.4%	継 続 ?	定植苗の発根・生育促進を図るため定植後50~200ppmを1~2回にわたって葉面散布したが、全般的に対照区と比較して有意差を示すまでに至らず、継続するとすれば散布方法、時期等を再検討することが必要	シオノギ製薬
O E D グリーン	オキシエチレンナタネ油アルコール 10%	継 続	寒干害防止を目的とするため、この時点では調査未了であり、次年度において検討	日研化学

I 除 草 剤

1. トリフルラリン

担当場所 茶業試験場，同枕崎支場，京都府立茶業研究所。

トレファノサイド粒剤については，45年度の検討結果から，イネ科雑草優占地帯でうね間に15g/a程度を表面施用することにより，実用化が可能であると判断された。しかし，株元に施用した場合の根に対する薬害の有無が，未解決事項として残ったので，46年は施用位置を中心に，施用量，土壌混和の有無，あるいは施用回数等も含めて，再度検討を行なった。

その結果，うね間だけに施用した場合と，株元から5cm程度まで近くに処理した場合とを比較すると，その抑草効果は株元近くまで処理した場合のほうがまさり，茶の生育状態にも変化がみられないこと，および実際には幼茶樹園の場合，株元にはわら，山草等でマルチングされることが多い，などから施用位置に制約を加えることはないとの結論に達した。ただ施用回数については，その回数の多いほど抑草効果はまざる傾向を示したが，別の試験で施用回数が多くなるにつれて，根に対する影響が懸念される傾向もみられたので，年2回程度の施用にとどめることとし，施用量については10～15g/aと幅を持たせ，土壌混和の有無については，判然とした傾向が認められなかったため，表面散布，土壌混和いずれでも良いこととした。

2. MB-206

担当場所 茶業試験場，同枕崎支場

MB-206を12g，15g/a土壌処理することにより，茶業試験場本場では処理30日後の調査結果から，第1回処理の場合無処理区の

15%，第2回処理の場合40%程度に抑草することができ，施用量の多いほうがまざる傾向を示した。しかし，抑草期間は第1回処理の場合15g/a施用で25～30日，第2回処理では15～20日間と，それほど永くなかった。また枕崎支場でも，本場とほぼ同程度の抑草効果が得られているが，その抑草期間は1～2回の処理を通じて10～20日程度で，本場の場合よりさらに短期間であった。

したがって，MB-206については，抑草効果もさることながら，抑草期間をもう少し増すためにも，施用量について継続検討が必要であるとされ，担当場所も2～3カ所増加して検討することとした。

3. テトラピオン（フレノック）

担当場所 茶業試験場，埼玉県茶業試験場，滋賀県茶業指導所

宿根性雑草のササ，チガヤ，ススキ等に対するフレノック液剤，粒剤の殺草効果を検討するため，春，秋2期に施用し，別に茶の生育に及ぼす影響を検討した。秋に処理した場合の殺草効果については，現在観察中であり明確ではないが，4～5月に処理した結果では，茶業試験場の場合チガヤに対する殺草効果の顕著なことが認められ，特に粒剤より液剤の効果が大きく，液剤90cc/a 施用区ではその後のチガヤの発生を全く認めていない。また埼玉県茶業試験場でもチガヤに対して，液剤で90cc/a 粒剤では100g/a処理により，殺草効果は顕著であった。ただ，チガヤについては滋賀県茶業指導所の場合，いったん枯死した後にでてきたものについては，異常を認めなかったことを報告している。

さらに滋賀県茶業指導所の試験結果ではスス

キに対して、剤型、散布量のいかんを問わず著好を示しており、またササに対しては、各区とも新発生のものについては生長点の枯死を認め、その後下部に移行して落葉することを観察した。

以上のように宿根性雑草に対するフレノックの効果は、かなり認められているが、秋処理の試験が継続中であること、および茶に対する影響がまだ明らかにされていないことから、継続検討することとした。

Ⅱ 生育調節剤

1. IBA（オキシベロン）

オキシベロンについては、茶のさし木での発根促進効果が認められているが、前年度からは定植苗の発根、生育促進に対する葉面散布の効果も検討している。本年は品種（2～3）、濃度（100、200ppm）、散布回数（1,2回）の3要因を取り、定植直後、2回散布の場合にはさらに1週間後に幼茶樹に散布して、発根、生育状態を調査した。

定植60日、120日後の調査結果から、茶業試験場では根の発育、地上部の生長ともに100ppm散布がややすぐれたが、散布回数との関係については一定の傾向がみられず、宮崎県総合農業試験場でも供試したやぶきた、やま

なみ両品種ともに、120日後の調査では無処理区を上回る効果は認められなかった。しかし、奈良県農業試験場のポット試験では、処理区のほうが発根量が多く、ほ場試験でも60日後の調査では、100ppmの1～2回散布区で、地上部、地下部の生長が有意差を示し、植え付け初期の発根に有効であることを示した。

以上3場所の試験結果を総合考察した結果、一部で効果が認められたものの、葉面散布による方法では、実用段階に持ち込むことは困難であろうと判断された。したがって、さらに試験を継続するとすれば、定植前の根に対する散布、定植後の土壌かん注、あるいは根の発育のおう盛な秋季の処理など、別の方法をとるべきであろうと結論された。

2. OEDグリーン

担当場所 静岡県茶業試験場、岐阜県農業試験場

茶の寒干害を防止するため、静岡、岐阜県下の寒冷山間地茶園において、12月中旬および1月中旬の2回にわたり、OEDグリーンの20倍液を150ℓ/10a茶葉に散布し、その防止効果を検討中であるが、成績検討の段階に至っていないので、この点は別の機会にゆずることとした。

昭和46年度林地関係除草剤

試験成績概要

農林省林業試験場除草剤研究室長 真部辰夫

検討会は昭和47年2月10日、日本植物調節剤研究協会会議室で行なわれた。供試除草剤

および検討結果は次表のとおりである。